

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：33305

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K21940

研究課題名(和文)「あるがまま」を問う：日本哲学における「現前」概念の研究

研究課題名(英文) Questioning "as it is": A Study of the Concept of "Presence" in Japanese Philosophy

研究代表者

森野 雄介 (Yusuke, Morino)

金沢学院大学・基礎教育機構・講師

研究者番号：80880963

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は西田幾多郎の「現前」概念の、アンリ・マルディネおよび大森荘蔵の哲学と比較を通じた明確化を目的とする。

初年度は、西田幾多郎の後期哲学における「事実」概念を再検討し、その問題点を明確化した。とりわけ、マルディネ、ヘーゲル論で論じられる「現前」に関する考察を手引きに、後期西田にその批判を適用する手法を用いた。

次年度は、西田幾多郎と比較を主題的に行った。大森荘蔵は西田幾多郎を強く非難する一方で、両者の哲学には明確な共通点がある。経験を主観と客観の分離に先立つ媒体的な「こと」と捉える側面である。他方で、両者の差異は西田が出来事の現前に強く定位する点にあることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的・社会的意義は、秘教的とされた日本哲学、西田幾多郎の哲学を、多くの研究者が理解可能な仕方でも内在的な問題点と固有の議論を明らかにした点にある。

とりわけ、本研究は、西田とは直接関係のないアンリ・マルディネ、大森荘蔵の哲学との比較を通じ、西田のテクストに閉じこもるのではなく、より広い視座からその哲学の特徴の明確化に努めた。本研究は、西田幾多郎の議論の特徴を出来事と媒体的・前対象的な経験の二重性に見出したが、これは日本哲学に通底する非常に大きな射程を持ったテーマである。西田だけでなく、九鬼など他の京都学派や廣松渉、大森荘蔵たちの東京学派、また他の日本の哲学者を通覧する図式を提供した。

研究成果の概要(英文)： This study aims to clarify the concept of presence in Kitaro Nishida's philosophy by comparing it with Henri Maldiney and Shozo Omori.

In the first year, we reconsidered the concept of fact in Nishida's later philosophy and clarified its problems. In particular, we applied Maldiney's critique of Hegel to Nishida's later works. The following year, we made a thematic comparison between Nishida Kitaro and Shozo Omori. Although Omori strongly accuses Nishida of mysticism, there are clear similarities between their philosophies. This can be seen in the attitude towards the understanding of experience. That is, they both argue that experience is medium(s) of "こと" before the division of subject-object. On the other hand, their differences lie in Nishida's strong orientation to the presence of events.

研究分野：日本哲学

キーワード：西田幾多郎 日本哲学 アンリ・マルディネ 大森荘蔵 現前 こと

1. 研究開始当初の背景

申請者はこれまで日本哲学、とりわけ西田幾多郎の哲学における感情および情動について研究を行ってきた。近年、西田幾多郎に限らず、日本哲学に関する国際的な注目が高まっている。この状況のなかで、国内の研究の課題は、日本哲学の固有性を主張するあまり、その内在的な問題点などを含めた批判的な検討が進んでいない点にあった。他方で、国外の研究の課題は、十分な量の翻訳が確保されておらず、テキストからは大きく離れた恣意的な解釈が散見される点にあった。これを踏まえ、本研究は日本哲学の独自性を、日本哲学以外の研究者にも理解可能なかたちで、できるかぎり批判的・中立的な観点から提示することを試みた。

このなかで、現在に現れている経験を示す「現前」の概念が日本哲学史を通じた鍵概念となっていることが浮上した。そして、批判的・中立的な観点から西田幾多郎の哲学を問題とするために、西田とは異なるパラダイムに属する大森荘蔵、アンリ・マルティネの「現前」をめぐる議論との比較という方法が浮上した。

2. 研究の目的

本研究の目的は日本哲学における「現前 (presentation)」の内実——とりわけ、西田幾多郎と大森荘蔵におけるものの解明である。西田幾多郎の哲学においては、「現前」という言葉は使われないもののカント的な「表象」に対抗する概念として「事実」が提示される。私たちは、研究期間の間、この「事実」概念に関する議論を大森荘蔵、アンリ・マルティネの哲学との比較を通じて、これまでにはなかった仕方でも明らかにしようとした。

現代フランス哲学において、「表象 (représentation)」批判は、ジル・ドゥルーズ『差異と反復』の最重要課題の一つだが、私たちはリヨン大学時代のドゥルーズの同僚であったマルティネの哲学に着目した。その理由として、マルティネは老子や荘子などいわゆる「東洋思想」を現象学的な視点を用いながら自らの議論に組み込んでおり、彼のいわゆる「東洋思想」の現象学的解釈を明らかにすることを通じて、西田幾多郎の哲学の解釈に新たな光を当てられるように感じられたためである。

くわえて、本研究にとっては、西田とは無関係の大森荘蔵の「立ち現われ論」が重要な議論として浮上した。というのも、大森は西田を強く批判するものの、その「立ち現われ論」は主観と客観に係る分節方法を徹底的に取り外したうえで見えてくる媒体的な「経験」に定位するものである。その点において、大森の議論は西田自身が取らなかった「純粹経験」の徹底化と捉えることもでき、両者の共通点と差異を明らかにすることで、これまでには見えていなかった日本哲学に通底する重要な問題を明るみだすことができるように思われた。

3. 研究の方法

方法として、本研究は以下の手法を用いた。

(1) アンリ・マルティネとの比較

ジル・ドゥルーズやジャン・ウリなどに影響を与えた現代フランスの哲学者アンリ・マルティネの著作のうち、*Regard, Parole, Espace* (Cerf, 2012)、*L'art, l'éclair de l'être* (Cerf, 2012)、*Penser l'homme et la folie* (Cerf, 2021)を中心に、一次文献において、マルティネがどのように「現前」を論じているか、あるいは、どのように「表象」を批判しているかを明らかにしようとした。

(2) 大森荘蔵との比較

大森荘蔵の著作のなかで、とりわけ、『物と心』、『新視覚新論』に焦点を当て、彼の「立ち現われ」に関する議論の論点の明確化に努めるとともに、他の著作で論じられている議論を分析することを通じて、西田との共通点・差異を明らかにしようとした。

(3) 他の日本の哲学者との比較

くわえて、新たに浮上した論点として、西田幾多郎の教え子に当たる西谷啓治、および京都学派とは直接の関係のない廣松渉の哲学を「現前」に着目しながら読解を進めていった。

4. 研究成果

初年度は、西田幾多郎の後期哲学における「事実」概念を再検討し、その問題点を明確化した。とりわけ、マルティネのヘーゲル論で論じられる「現前」に関する考察を手引きに、後期西田にその批判を適用する手法を用いた。

次年度は、西田幾多郎および京都学派の哲学者と大森荘蔵・廣松渉の「現前」に対する考察の比較を主目的に行った。大森荘蔵は西田幾多郎を強く非難する一方で、両者の哲学には明確な共通点がある。経験を主観と客観の分離に先立つ媒体的な「こと」と捉える側面である。他方で、

両者の差異は西田が出来事の現前に強く定位する点にあり、そこに西田の哲学の特徴があることを明らかにした。

最終年度は、これまで明らかにした論点を統合し、より射程の広い「もの」・「こと」の対象の差異の哲学へとブラッシュアップすることを目的に研究を行った。

主な研究成果としては、次の結果を得ることができた。

西田幾多郎の「事実」概念の再検討。

西田幾多郎の後期哲学における「事実」概念の内実を批判的に再検討した。具体的には、アンリ・マルティネの *Regard, Parole, Espace* に収録されたヘーゲル論を分析した。そして、マルティネのヘーゲル批判を西田の後期哲学に読み込むことを通じて、後期西田のある特徴を明確化した。

その特徴とは、三人称的な言語の特権視に基づく「人間」、「歴史」概念の前景化である。私たちにとっては、後期西田はマルティネがヘーゲルを批判するのと同様の仕方で、一人称的な行為を全体性に仮託することでしか論じられておらず、その点に欠落があることを論じた。

だが、批判だけではなく、これまでに論じられてこなかった西田幾多郎の哲学の可能性を明確化することもできた。それはマルティネのポイエシス概念を踏まえたうえでの、西田のポイエシス概念の再構築である。つまり、三人称的な現れから、前人称的な事実へと遡及する方法をマルティネは画家たちの活動を踏まえ、「抽象 (abstraction)」として提示する。このような遡及による創作をもとに、前人称的な経験への遡及と接続に基づく変容として、後期西田の「ポイエシス」概念を解釈することで、中期著作の議論をもととしたポイエシス概念が提示可能であることを示した。

なお、この論点は「猫と歴史的世界 あるいはストレンジャーのポイエシス アンリ・マルティネから西田幾多郎を読み直す」(『金沢学院大学紀要』第20号)として論文化した。

西田幾多郎以降の「現前」概念の調査と検討

大森荘蔵と西田幾多郎の「現前」に関する思考を比較するために、日本古典研究を用いるという手法を用いた。なかでも、西條勉の日本古典文学における「もの」・「こと」に関する分析を手引きに、それらの議論を西田・大森に逆照射することで、両者の差異と共通点を明らかにできた。

西田と大森の共通点は、科学的な描写とは異なる「日常茶飯の経験」の端的で的確な記述を試みる点にある。そして、その経験に肉薄するために、大森は西田の「純粹経験」よりも徹底しているように思われる。というのも、彼は「主観」・「(物理的)対象」・「現象」・「(認識)知覚作用」という四分枝を停止する点で、「主客未分」を主張する西田よりも一歩進んでいるためだ。

だが、西田も中期になると「場所」という概念を案出する。そして、『無の自覚的限定』ではこの「場所」が経験の前対象的な媒体的性格を記述するために用いられる。つまり、「もの」の成立に先立つ「於いて」が指摘されるのだが、大森も『新視覚新論』で同様の主張を行う。つまり、彼らの共通点は(1)言語的な分節が施された経験以前にさかのぼろうとする傾向、(2)現象の媒体的性質に定位する、この二点であると言える。

他方で、西田の議論の特徴は次の点にある。大森が他者問題をアポリアと捉え、後期においてその解消に向かうのに対し、西田は中期以降、他者性、他者のわかりえなさを出来事の本質的な性質と提示するようになる。媒体的な経験における出来事との出会いに基づく経験の組織化の記述が、大森にない西田に特有の議論であり、それは日本の古典文学における「もの」をめぐる考察とリンクすることを明らかにした。

なお、この論点は「事実の形而上学、双生の「こと」 西田幾多郎『無の自覚的限定』と大森荘蔵、西條勉」(『金沢学院大学紀要』第21号)として論文化した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 森野雄介	4. 巻 21
2. 論文標題 事実の形而上学、双生の「こと」 西田幾多郎『無の自覚的限定』と大森荘蔵、西條勉	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 金沢学院大学紀要	6. 最初と最後の頁 212-231
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森野雄介	4. 巻 20
2. 論文標題 猫と歴史的世界 あるいはストレンジャーのポイエシス	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 金沢学院大学紀要	6. 最初と最後の頁 238-257
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 森野雄介
2. 発表標題 獣道を散歩する 日本哲学における獣の位置づけをめぐって
3. 学会等名 京都学派およびポスト京都学派における科学哲学および技術哲学研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 森野雄介
2. 発表標題 すれちがいと感覚の真理 西田幾多郎「私と汝」註解
3. 学会等名 檜垣立哉教授大阪大学最終年度記念シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2022年～2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------